

# 坂丈緒訳『ローランの歌』における造語・既存の語の応用について<sup>1</sup>

黒 岩 卓

中世フランスの代表的叙事詩『ローランの歌』の初の日本語訳は、坂丈緒によって成し遂げられ、『ロオランの歌：回教戦争』のタイトルの下 1941 年にアルスより出版された（以下「アルス版」とする）<sup>2</sup>。この翻訳は、古フランス語や中期フランス語の原文から一つの纏まった作品を日本語に訳し、それを独立させて出版した例としては、最初期のものであることは間違いがない<sup>3</sup>。したがってこの訳書は日本における中世フランス文学の受容において重要な位置を占めている。その一方で、この訳書が長らく半ば忘れられた存在になっていたことにも注目しなければならない<sup>4</sup>。そこにはさまざまな理由が考えられるが、

<sup>1</sup> 本稿は JSPS 科研費 20K00515 の助成を受けている。

<sup>2</sup> 『ロオランの歌：回教戦争』坂丈緒訳（世界戦争文学全集 6）、アルス、1941。なおこのタイトルも含め、本稿の本文・脚注で引用する書名や文章に現れる漢字は現代風のものを用いている。またルビについても省略する。なお、坂訳以前の翻案（かなり正確に筋をおったもの）として井上勇、昇曙夢編『神話傳説大系 第九卷 佛蘭西・露西亞篇』、東京、近代社、1928 に収録されたものがある。

<sup>3</sup> 座談会「フランス中世文学と日本」（『流域』、57（2005/2006））における松原秀一の発言を参照（pp. 56-57）。これより先に佐藤輝夫によるヴィヨンの訳が出版されている（フランソワ・ヴィヨン『大遺言書』佐藤輝夫訳、弘文堂、世界文庫、1940）。

<sup>4</sup> 代表的なアンソロジーである『フランス中世文学集』（白水社、全四巻、1990-1996）の第 3 巻および第 4 巻、また入門書である『フランス中世文学を学ぶ人のために』（原野昇編、世界思想社、2007）に掲載された書誌でも、この坂訳については触れられてない。本稿の筆者はこれまでに様々な面からこの訳書の分析を行っている（直近のものでは Kuroiwa Taku, “The Ideological and Human Background of *The Song of Roland: Islamic War*: Regarding the References about Islamic Civilization”, *YONAOSHI. Visions of a Better World*, edited by

このアルス版が日本の戦争プロパガンダの枠組みのなかで発表され、それゆえに戦後の日本社会にはそぐわないものとなったことが大きいと思われる。

戦前の文化エリートの家庭に生まれ、青年期にはフランスで文献学を学んだ坂丈緒は、日本における中世フランス文学の先駆的紹介者としてさまざまな注目すべき仕事を残している<sup>5</sup>。さらに坂による『ローランの歌』の日本語訳は戦後になって河出書房版『世界文学全集』にも収録されている（1952年刊。以下「河出書房版」とする<sup>6</sup>）。アルス版の出版から佐藤輝夫訳（1962年）そして有永弘人訳（1965年）が出版されるまでの約20年間、坂訳は唯一の原文からの邦訳だったのである<sup>7</sup>。とりわけ戦後には『ローランの歌』の児童向け翻案が多数出版されているが、坂訳がそれらの典拠（少なくとも主要なものの一つ）となっていた可能性もある。

このように坂丈緒による『ローランの歌』の二種の日本語訳はさまざまな視点からの分析が可能だが、本稿で筆者は「中世フランスを表現するための日本語の創造」という観点からの分析を行いたい。後に引用するように、このことを訳出にあたって苦心したポイントとして坂自らが挙げているからである<sup>8</sup>。狭くは坂丈緒という仏文学者、広くは近代日本の翻訳者たちが、西洋中世の文物を日本語の世界に採り入れる際に払った苦心が、これら訳語の分析から透けて見える

---

Christopher Craig, Enrico Fongaro, Luca Milasi and James Tink, *Mimesis International*, 2022, pp. 47-64 がある）。筆者以前には原野昇による紹介がある（Harano Noboru, « Historique de l'étude des chansons de geste françaises au Japon », *Mélanges de langue et de littérature du Moyen Âge offerts à Teruo Sato, professeur honoraires aux Universités Waseda et Meisei, par ses amis et ses collègues*, Tokyo, Comité de Publication des Mélanges Sato II, 1993, pp. 11-17 および原野昇「異文化接触としての『ローランの歌』」、同『フランス中世の文学』所収、広島大学出版会、2005、pp. 165-204）。

<sup>5</sup> 坂はすでに1930年に同人誌『竹』で、中期フランス語による原文の読解に基づいたヴィヨンの紹介を行っている（阪丈緒「去にしへの雪」、『竹』2月号、1930、pp. 3-7）。

<sup>6</sup> 『ローランの歌』坂丈緒訳、『世界文学全集 古典篇 中世叙事詩篇』所収、河出書房、1952。

<sup>7</sup> なお佐藤輝夫はこの間に『ローランの歌』の児童向け翻案を出版している（『ローランの歌』、『世界少年少女文学全集』2（中世編）所収、創元社、1954、pp. 71-121）。

だろう。本稿ではまず坂訳における造語や既存の語の応用を検討し、どのようにこれらの語が形成されまた用いられているかを明らかにする。その後アルス版と河出書房版の訳文を比較し、敗戦を境として訳文にどのような変化があったのかを明らかにする。最後に坂による造語および既存の語の応用が、どの程度まで佐藤輝夫と有永弘人による日本語訳に継承されたのかを検討する。

## Ⅰ 坂文緒訳『ロオランの歌：回教戦争』における造語・既存の語の応用

先に示したように、坂による『ロオランの歌：回教戦争』は中世フランス文学の先駆的な翻訳であった。これはとりもなおさず先例が少なかったということでもあり、以下の引用に見られるように、坂は訳出にあたって相当な苦心をしたようだ。

訳文が多少擬古的になり過ぎた嫌ひがあるが、それは一つには古代仏蘭西語で書かれたこの古い物語の調子に引摺られたせゐであり、一つには又、語感の新し過ぎる言葉は、如何に翻訳と雖も避けたかったので、何れの時代にも存在しなかつたやうな、かゝる奇妙な文体が出来上がった次第である。武具、馬具を初め服装や風俗を示す単語は、出来るだけそれに近い物を示す和名を用ひ、又さう云ふ物の名所の全く日本に存在しない物には、訳者が適当と考へた和名を発明するより外なかつた。これは何れにしても一種の符牒に過ぎないから、それ等が実際何んなものであつたかは、別項の説明と図版によつて出来るだけ明かにして置いた積りである。<sup>9</sup>

この引用から伺えるのは、ある種の「古さ」を漂わせつつしかも統一感を失わない訳文を作ろうと坂が苦心したこと、それと同時に日本に存在しなかった

<sup>8</sup> ラテン語や古フランス語、中期フランス語のテキストをどのような日本語を用いて訳すべきかという問題に、坂は強い関心をもっていた。彼が行った他の翻訳の序文でもこの問題についての思考が伺える（ガストン・パティ『演劇の本質』坂文緒訳、白水社、1942、pp. 13-14）。また訳文になされた多大な配慮は『ロオランの歌：回教戦争』の「売り」にもなっていた。アルスより出版された『独逸海軍』の末尾の広告では「訳文流麗、一脈古調を湛へて絢爛無比」との文言が見られる（小島秀雄・塚田収著『独逸海軍』（ナチス叢書）、アルス、1941を参照）。

<sup>9</sup> 『ロオランの歌：回教戦争』（アルス版）、前掲書、p. 3を参照。

文物については造語などを行わざるを得ず、結果として文体上の混淆が避けられなかったということである。彼は自らの試みの結果を「何れの時代にも存在しなかつたやうな、かゝる奇妙な文体」としているが、古フランス語で書かれた武勲詩を二十世紀のしかも「古さ」を感じさせうる日本語に移し替えるというこの試みにおいて、ある種の「奇妙」さが生じるのは避けがたかったと思われる。

では坂は具体的にどのような造語や既存の語の応用を行ったのだろうか。坂自身がみずから格別の注意を払った例として解説で挙げているのは「礼鎧」、「鎖鎧」、「鎖頭巾」、「臍」、「襖」、そして「臣将」である<sup>10</sup>。実際にこれらの語は、出版当時の最大級の国語辞典であった『修訂版・大日本国語辞典』には見いだされないか、収録されていたとしても『ロオランの歌：回教戦争』での用法は定義に含まれていない<sup>11</sup>。以下、一つ一つを検討する<sup>12</sup>。

### 礼鎧

これは坂が原文の *bronie* の訳語としてあてているもので、現代の最大級の仏和辞典である『小学館ロベール仏和大辞典』では「(9～13世紀にかけて用いられた) 鎖鎧(くさりよろい)、鎖かたびら」という訳がなされている<sup>13</sup>。今日の代表的な国語辞典である『日本国語大辞典』第2版<sup>14</sup>にもこの語には独立した項目は存在していない。坂自身は「[...] シャルル王朝時代、即ち九世紀から十世紀頃の武人は、一様に、丈夫な布、或は革の上に、金属の板で作った礼(さね)を鱗の様に縫ひ付けた鎧を着てゐた。[...] しかしこの鎧は下の方から切り込まれた場合には甚だ危険なので、十一世紀には金物の小さい輪を並べて布か革に縫ひ付けるとか、[...] 或は厚い革の細紐を縦横に編んで、これを金属の丈夫な鋌で下地の布に固定したもの [...] などが用ひられて居たらしく、これ等はすべて、訳文中には礼鎧と訳して置いた [...]」<sup>15</sup>としている。他方で坂は「鎧の礼」という語も *bronie* の訳語として用いている(242 レッス<sup>16</sup>)。

<sup>10</sup> 同上、pp. 221-226 を参照。

<sup>11</sup> 上田萬年・松井簡治『修訂版・大日本国語辞典』、富山房、1939-1941、全5巻。

<sup>12</sup> 訳文中の出現箇所については論文末尾の表1を参照。

<sup>13</sup> 『小学館ロベール仏和大辞典』(小学館、1988)、*broigne* の項を参照。

<sup>14</sup> 『日本国語大辞典』第二版、小学館、13巻+別巻、2000-2002。

<sup>15</sup> 『ロオランの歌：回教戦争』(アルス版)、前掲書、p. 222。

## 鎖鎧

坂は原文の *osberc* にこの「鎖鎧」をあてている。『修訂版・大日本国語辞典』ではこの語は「鎖鎧」は「くさりのよろい」という読み方で、かつ馬が用いるものとして収録されている<sup>17</sup>。坂自身も「鎖鎧という言葉は、和名では馬の武装にしか無いが、訳文中では、勿論人間の着るこの種の物具の事である」<sup>18</sup>と断っている<sup>19</sup>。この語についても『日本国語大辞典』第2版には独立した項目がない。現代フランス語では *haubert* という綴りになるが、現代日本の辞書では「(カロリング朝末期から使われた、袖(そで)や頭巾(ずきん)の付いた)長い鎖帷子(かたびら)」とされている<sup>20</sup>。なお、坂は原文の *brunie* にもこの訳語をあてている(215 レッス)。

## 鎖頭巾

坂自身は頭を守る種々の防具を示す複数の語(*ventaille*, *cors*, *capelers*)にこの「鎖頭巾」をあてている。彼は「[...] 兜の下には鎖で編んだ防寒帽の様な形の頭巾を被つて顔の下半分を掩ひ、これが肩から胸にまで垂れ、その縁を革紐(緒)で鎧に結び付けてあつた。(鎖頭巾と訳し、第五図及び第八図の中央の武士などに見られる。[...])」としている<sup>21</sup>。『修訂版・大日本国語辞典』にはこの語は収録されていないが、『日本国語大辞典』第2版には1679年の用例が収録されている<sup>22</sup>。

## 臍

この語は原文の *boucle* に対応している語である。この語は坂の造語ではな

<sup>16</sup>「LESS」とは『ローランの歌』における詩節の単位のことである。同一LESSのなかでは詩行末尾が同じ母音で統一されている。

<sup>17</sup>『修訂版・大日本国語辞典』、前掲書、第2巻、p. 238。

<sup>18</sup>『ロオランの歌：回教戦争』(アルス版)、前掲書、p. 222。

<sup>19</sup>他方、坂以前にも「鎖鎧」については、吉江喬松が「鎖子鎧」の語を「くさりよろひ」の読みかたの下に用いている(吉江喬松「仏蘭西文学概観(1)」、『世界文学講座 5 仏蘭西文学篇 上』所収、1929、新潮社、p. 37)。

<sup>20</sup>『小学館ロベール仏和大辞典』、前掲書を参照。

<sup>21</sup>『ロオランの歌：回教戦争』(アルス版)、前掲書、pp. 222-223。

<sup>22</sup>『日本国語大辞典』第2版、前掲書、第4巻、p. 817。

いが、『修訂版・大日本国語辞典』には武具としての用例は見られない。坂自身は「[...] そして其の [=盾の] 中央の邊には鍾乳状に突き出た特に堅固な金具があつて、時にはこれに宝石などを嵌め込んであつたのを、訳文には古代希臘の丸盾の同じ様な部分の名から考へつて臍（ほぞ）と名付けて置いた。

「[...]」<sup>23</sup>としている。坂は古代ギリシア語に通じていたから、ここで「古代希臘の丸盾」が援用されるのは自然なことと言える。『日本国語大辞典』第2版で示されている最も古い用例は877年のものである<sup>24</sup>。

### 襖

この語は原文の *blialt* の訳として用いられている。『修訂版・大日本国語辞典』では「襖」は「武官の制服」や「狩衣」とされている<sup>25</sup>。坂は「なほ武具を着けてゐない時の貴族の服装は [...] 下着の襖衣の上に、襖（あを）と訳した衣を着、其上に厚い布或は毛皮の外套を背負ふ。[...]」<sup>26</sup>としている。『日本国語大辞典』第2版での最初の用例は718年のものであり、「臍」と同じく語そのものの古さが注目される<sup>27</sup>。

### 臣将

これは原文の *per* の訳だが、例外的に *cumpaignuns* の訳語として用いられることもある<sup>28</sup>。坂は「十二臣将といふ訳名は、四天王などから考へつた洒落だが、これはシャルル大王を基督に見立てた訳でもあるまいが、十二使徒に倣つて、十二人の重臣をこれに与へた訳で、其名は第百七十七節に残らず出てゐる [...]」<sup>29</sup>としている。坂が「洒落」というのは仏教の「十二神将」の音に合わせていることを指しているのだろう。もちろん、この語は『修訂版・大日本国語辞典』と『日本国語大辞典』第2版には独立した項目として存在しない<sup>30</sup>。

<sup>23</sup>『ロオランの歌：回教戦争』（アルス版）、前掲書、p. 223。

<sup>24</sup>『日本国語大辞典』第2版、前掲書、第12巻、p. 104。

<sup>25</sup>『修訂版・大日本国語辞典』、前掲書、第1巻、p. 157。

<sup>26</sup>『ロオランの歌：回教戦争』（アルス版）、前掲書、p. 226。

<sup>27</sup>『日本国語大辞典』第2版、前掲書、第1巻、p. 78。

<sup>28</sup>図表1を参照。

<sup>29</sup>『ロオランの歌：回教戦争』（アルス版）、前掲書、p. 226。

<sup>30</sup>他方で「神将」は存在する（『日本国語大辞典』第2版、前掲書、第7巻、p. 623）。

以上の例からまずわかることは、坂がかなり古い時代に由来する日本語の語彙を用いることをためらわないことである。自ら「古い物語の調子に引摺られた」としているように、『ローランの歌』の作品内の時代（8世紀）あるいは作品成立の時代（11世紀末ごろ）に合わせて、その時代に用いられていた日本語の語彙を用いようとしたのかもしれない<sup>31</sup>。他方で彼がギリシア文化や仏教などの知識を用いつつ訳語を模索していることも注目される。

## II アルス版と河出書房版の訳文の相違

本稿の冒頭で述べたように、坂丈緒による『ローランの歌』日本語訳は二種存在する。戦後になって河出書房版『世界文学全集』に坂訳の『ロオランの歌』が収録されたからである（1952年刊）。もちろんこの河出書房版ではアルス版にみられたプロパガンダ的な解説は全て姿を消している。他方で本文を検討してみると、多少なりとも変更が行われた箇所は300以上にも及ぶ（その大きなものを論文末尾の表2にまとめておいた）<sup>32</sup>。それらの変更を検討した結果、とくに注目すべきと思われた点を以下に列挙する。

### 古フランス語原文への接近

アルス版と河出書房版のやや長めの相違を検討すると、河出書房版ではベディエの校訂本で提示されている古フランス語のテキストに、訳文を近づけようとする配慮がより強く見られるということがわかる。

### 「…」や「〔 〕」の使用

アルス版、河出書房版ともに日本語訳の底本としているのは、ジョゼフ・ベディエによる校訂版である（1931年に出版された第92版）<sup>33</sup>。ベディエの校訂本文には写本上の欠落などを示す「…」が用いられているが、アルス版ではこれらの欠落などには訳文に反映されていない。坂によれば「ミュウラアの補正に従ってレオン・クレダが刊行した本によつて話の筋の通るやうに直した」<sup>34</sup>とのこ

<sup>31</sup> 同時に「鎖頭巾」にみられるように、初出の比較的新しいものもある。

<sup>32</sup> この数は変更箇所の範囲をどのように定めるかによって増減がある。あくまで近似的な数値として提示する。

<sup>33</sup> Joseph Bédier (éd.), *La Chanson de Roland*, Paris, H. Piazza, 92<sup>e</sup> édition, 1931.



とである。これに対して河出書房版の訳文ではクレダ版を参照したことへの言及がなくなる一方、頻繁に現れる「…」によってベディエによる校訂本で示されていた写本での欠落などが明示されるようになる<sup>35</sup>。また「[ ]」の記号によって欠落箇所になされた補足が明確にされている<sup>36</sup>。総じて河出書房版は写本（あるいはベディエの校訂本文）の状態をより直に示そうとしたといえる。

### 仮名遣いや漢字の使用の変化

アルス版の旧仮名遣いに対して河出書房版では新仮名遣いが採用されたことは勿論だが、漢字の使用もやや減っている（前述の「臍」も「ほぞ」とされている）。「軍兵」が「武者」、「干戈を交えて」が「剣にかけて」など、時代がかった言い回しもより平易なものとなり、句読点も増加している。他方で「夷狄」のような強いコノテーションを持つ表現がそのままに保存された例もあり<sup>37</sup>、さらに「大司教」が「大僧正」になったりと、その変更の理由が一考に値すると思われるものもある。先に検討した造語や既存の語の応用についてはとくに変更はないが、河出書房版の解説ではこれらの試みについての言及はごく簡単なものとなっている<sup>38</sup>。

総じて、全体としてみれば訳文上の大きな変化はないものの、細部を検討すると河出書房版にはよりベディエの校訂本文、ひいてはそれが依拠している写本の状態をより忠実に反映させようという意図が見られる。また仮名遣いや漢

<sup>34</sup>『ロオランの歌』（河出書房版）、前掲書、p. 3.

<sup>35</sup>表 3 を参照。この記号についての坂による解説については『ロオランの歌』（河出書房版）、前掲書、p. 356 を参照。なおベディエの校訂本文に現れた「…」が全て河出書房版に反映されているわけではないことも付記しておく。

<sup>36</sup>これらの補足の典拠については稿を改めて検討したい。

<sup>37</sup>この「夷狄」の使用については以下の拙稿を参照：Kuroiwa Taku, “The past as a place of cultural transfer and literary invention —Notes on the presentation of the French medieval culture by Ban Takeo—”, *The past as a source of imagination and inspiration*, ed. by Kuroiwa Taku and Chiara Ramero, GPJS (Tohoku University)/LITT&ARTS (Grenoble Alpes University), October 2021, pp. 15-24 (Tohoku University Repository (TOUR) で公開：<http://hdl.handle.net/10097/00133292>)。

<sup>38</sup>坂は武具等については本文中の挿絵を参照するように読者に求めている（『ロオランの歌』（河出書房版）、前掲書、pp. 350-351）。ただしアルス版でも図像資料は多数収録されている。



字はより平易なものになっているが、彼自身による造語や既存の語の応用については愛着があったのか、大きく変化しているところはない。

### III 佐藤輝夫訳・有永弘人訳における訳語の継承

ところで今日よく読まれている『ローランの歌』の日本語訳を世に送り出したのは佐藤輝夫と有永弘人だが<sup>39</sup>、彼らが坂丈緒訳の存在を知っていたことは明らかである<sup>40</sup>。佐藤輝夫と有永弘人は先に検討したような坂による造語や既存の語の応用に対して、どのような態度をとったのだろうか。以下にそれを検討する（論文末尾の表1も参照）。

#### 礼鎧 (bronie)

佐藤、有永ともにこの造語はまったく継承していない。佐藤は「革鎧」（注あり）、「鎧」、「物の具」、「鎖鎧」としている。これに対して有永は「板金鎧（いたがねよろい）」とし注をつけている<sup>41</sup>。

#### 鎖鎧 (osberc)

佐藤はこれを「鎖」、「鎖鎧」、「鎖帷子」としている。有永は「鎖鎧」、まれに「板金鎧」としている。坂の訳語がよく継承されているといえるだろう。

#### 鎖頭巾 (ventaille, cors, capelers)

この語も佐藤・有永ともに継承していない。前者は「目庇」、「兜下」（注あり）、「鎖の兜下」、「直垂」としており、後者は「頬隠し」、「頭巾」、「鎖の帽子」としている。両者はともに原文における語の使い分けをより忠実に日本語訳に反映させるべきと考えたのだろう。

<sup>39</sup>『ローランの歌』佐藤輝夫訳、『世界文学大系』65所収、筑摩書房、1962および『ローランの歌』有永弘人訳、岩波文庫、1965。

<sup>40</sup>佐藤輝夫『仏蘭西中世「語りもの」文藝の研究』、白水社、1941、pp. 13-14および『ローランの歌』有永弘人訳、前掲書、p. 290。

<sup>41</sup>ただしこの有永の「板金鎧」は今日では「ばんきんよろい」と読まれ、いわゆるプレートアーマーを指すようである。日本語版 Wikipedia の「プレートアーマー」の項を参照（2023年1月17日閲覧）。

臍 (boucle)

この語も佐藤と有永はあまり継承していない。佐藤は「尾鉾」とし初出で注をつけているが、他の箇所では「ほぞ」や「刳型」ともしている。有永は「飾り」ともするがほとんどの場合「丸鉾」としている。佐藤のケースに鑑みればまったく坂の訳が継承されていなかったわけでもないが、その度合いは極めて低い。

襖 (blialt)

この語も佐藤・有永ともに継承していない。佐藤は「着長（きせなが）」とし、注をつけている。有永は「下衣（ブリオー）」としている。

臣将 (per)

この語については佐藤と有永ではっきりと態度がわかれている。佐藤は原文中の .XII. per については「十二人衆」としている。「戦友」としている例もあるが、それは坂が原文の *cumpagnon* を「臣将」としたケースである（273 レッス）。これに対して有永は「十二臣将」や「臣将十二人」といった語順の違いはあっても、「臣将」を継承している。「戦友」とするのは佐藤と同様に 273 レッスの場合である。

総じてまず「礼鎧」、「襖」、「臍」はあまり継承されていないことが分かる。語感が戦後の読者には受け入れられえないと判断されたのだろうか。また「鎖頭巾」については、もともと原文の語がさまざまであることから、佐藤・有永ともに訳しわけることを選んでいる。これに対し「鎖鎧」は佐藤訳・有永訳ではほぼそのまま採用されている。また「臣将」についても佐藤訳では避けられているが有永訳ではかなり忠実に採用されている。以上をまとめると、坂の採用した語彙のなかで、語そのものが馴染みやすいもの（「鎖鎧」）や、漢字から対象が想像しやすかつ語呂がよいもの（「臣将」）は継承されやすかったといえるだろう。また有永訳の「板金鎧（いたがねよろい）」のように、語形成の仕方が採用された例もある。

**結論**

以上、坂丈緒訳による二種の『ローランの歌』の訳文をその後の影響も含め

て検討してきた。坂が苦心して考え出そうとした「中世フランスを表現するための日本語」は、さまざまな時代の日本語のみならず、古代ギリシア文化や仏教からの発想を利用しながら編み出された。また 1941 年に出版された訳文は戦後にいっそうの文献学的正確さを付与され、60 年代以降の日本語訳にも程度の差はあれ継承された。その具体的な方法は、既存の語を組み合わせること、また既存の語に新しい用法を付与することであった。一言でいえば、東西の文化を参照しつつ、既存の日本語の語彙を応用することで中世フランスの文物を表現しようとしたのである。坂の言う「何れの時代にも存在しなかつたやうな、かゝる奇妙な文体」とは、坂自身の和洋の文化についての広くかつ深い教養を反映するものであり、種々の文化的伝統を綜合するものであったともいえるだろう<sup>42</sup>。

(東北大学大学院文学研究科准教授)

---

<sup>42</sup> 坂の訳にはその過渡期的な試みの故か、その後にあまり継承されなかった諸点もある。シャルルマーニュに対して天使がいわば目上の者に対するように語ることがその一例である (179, 203, 261, 291 レッス)。これらについても他の機会に検討を行いたい。

表 1 坂訳における造語・既存の語の応用とその継承（「{ }」はルビを示す）  
（坂訳とレッス数数が異なる場合は併記する）

札鏝 <i>bronie</i>		
坂訳のレッス	佐藤訳	有永訳
29	皮鏝（注付）	22 板金鏝（いたがねよろい）（注付）
107	鏝	108 板金鏝（いたがねよろい）
112	鏝	113 板金鏝
116	鏝	115 板金鏝
119	鏝	118 板金鏝
122	鏝	121 板金鏝
224	鏝	225 板金鏝
225	物の具	226 板金鏝
227	鏝	228 板金鏝
228	鏝	229 板金鏝
238	鏝	239 板金鏝
241	鏝	242 鏝
242 鏝の札	鏝鏝	243 板金鏝

鎖頭巾 <i>ventaille</i>		
坂訳のレッス	佐藤訳	有永訳
100	目庇	101 鎖隠し
104 (cors)	兜下（注付）	105 頭巾（ずきん）
248 (capeters)	鎖の兜下	249 鎖の帽子
249	直垂 {ひたたれ}	250 鎖隠し

鎖鏝 <i>osberc</i>		
坂訳のレッス	佐藤訳	有永訳
99	鎖鏝	110 鎖鏝
101	鏝	102 鎖鏝
104	鎖鏝	105 鎖鏝
118	鎖鏝	117 鎖鏝
120	鏝	119 鎖鏝
142	鏝	143 鎖鏝
145	鏝	145 鎖鏝
154	鎖帷子 {くさりかたひら}	155 鎖鏝
160	鏝	161 鎖鏝
161	鏝	162 鎖鏝
183	御鏝	184 鎖鏝
215 (brunie)	鏝	216 板金鏝
225	鎖鏝	226 鎖鏝
280	鏝	281 鎖鏝

臍（河出書房版では「ほぞ」） <i>boucle</i>		
坂訳のレッス	佐藤訳	有永訳
96	尾錠（注付）	飾り
99	尾錠	100 丸錠
103	尾錠	丸錠
228	ほぞ	丸錠
258	朝型 {くりがた}	丸錠
259	朝型	丸錠

(十二) 臣将 (XII) <i>per</i>		
坂訳のレッス	佐藤訳	有永訳
18	十二人衆	18 十二臣将
24	十二人衆	21 十二臣将
41	十二人衆	42 臣将十二人
42	十二人衆	43 臣将十二人
67	十二人衆	68 十二臣将
68 (cumpaignuns)	十二人衆	69 戦友十二臣将
72	十二人衆	73 十二臣将
75	十二人衆	76 十二臣将
76	十二人衆	77 十二臣将
77	十二人衆	78 十二臣将
105	十二人衆	106 十二臣将
110	十二人衆	111 十二臣将
115	十二人衆	114 十二臣将
177	十二人衆	178 十二臣将
184	十二人衆	185 十二臣将
199	十二人衆	200 十二臣将
200	十二人衆	201 十二臣将
230	十二人衆	231 十二臣将
272	十二人衆	273 十二臣将
273(cumpaignun)	戦友	274 戦友

襦 <i>blait</i>		
坂訳のレッス	佐藤訳	有永訳
20	20 着長 {きせなが}	23 下衣 {プリオール}
161	161 着長 {きせなが}	162 下衣 {プリオール}

表2 アルス版と河出書房版の間の差が大きい箇所 (「{}」はルビを示す)

LESS	アルス版	河出書房版	ペディエ校訂 (1931年, 第92版)	対比箇所の詩行
12	大司教チュルバン,	大僧正チュルバン,	Le duc Oger e l'arcevesque Turpin,	
27	ロオラン殿は、殿様が高貴の御家筋にお生まれなされた事を お忘れ召されたものかと存ぜられます	ロオランが、殿様を御指名なさるとはけしからぬこと。 こんなお役目は高貴のお生れに似つかわしくございま せん	Li quens Rolland nel se doist penser, Que estrait estes de multi grant parented. »	
35	右手 {ゆんで} に	左手 {ゆんで} に	En sun puign destre par l'orie punt la tint.	
41	あの年老いたシャル大王が	あの年老いて髪の高いシャル大王が	De Charlemagne, ki est canuz et vielz !	
54	古式に従ひ両手を合せて	両手を合せて	Jointes ses mains iert vostre comandet ;	
67	二万騎の将卒と共にあつたが、	二万騎のフランクの将卒と共にあつたが、	.XX. milie Francs unt en lur cumpaigne,	
69	今日まで幾年月を、兵馬の間に具 {つぶさ} に辛苦を嘗 め、干戈を交へて敵を敗つた手柄の褒美として、私がこ の太刀でロオランを斬り殺す事をお許し下さい。	幾年月を君に仕えたむくいとしては、ただ兵馬の間に具 {つぶさ} に辛苦をなめ、干戈を交えて敵を敗つたばか りです。今日こそその褒美として、ロオランを討つこと をお許し下さい。この太刀の鋭い刃に切つて捨てましょ う。	« Bel sire reis, jo vos ai servit tant, Sin ai oût e peines e ahans, Faites batailles e vengues en champ ! Duneez m'un feu, ço est le colp de Rollant ; Jo l'ocirai a mun espiet trenchant.	
73	ロオランに出会しましたなら、	ロオランに出くわしましたなら、	Se trois Rollant, de mort li duins fiance,	
74	王として顔出し出来ぬ事になります。	王冠を戴れぬことになりました。	Jamais en tere ne porterai curone. »	
75	又オリギエを始め十二臣将等にもこの世の引導渡して くれませう。	旗頭のオリヴィエとても同断、十二臣将らにこの世の引 導渡してくれましよう。	Ne Olivier, ki les altres cadelet.	
77	これに恥辱を与へ、	フランスに恥辱を与へ、	Li .XII. per tuit sunt jugez a perdre.	
78	四頭の驃馬につける荷を、軽々と運ぶ事の出来る男が現 れた。	四頭の驃馬がつけるよりも更に大きな荷を、軽々と運ぶ 男が現れた。	Franceis murrunt e France en ert hunie ; Greignor fais portet par giu, quant il s'enveiset, Que .III. mulez ne funt, quant il suneient.	
78	悪魔の国と言ひ習はすといふ。	魔の住む国と言ひ習はす。	Dient alquanz que diables i meignent.	

78	人前でお笑ひ下さつても苦しいござらぬ。	信なき者と思し召されい、	Se ne l'asaill, dunc ne faz jo que creire,
83	この刃渡を髭元まで、	黄金づくりの髭元まで、	Sanglant en ert li branz entresqu'a l'or.
88	虎	獅子	Plus se fait fiers que leon ne leupart.
90	殿 {しんがり} の勢 {せい} は思ひ通りにはならぬぞ、	思いどおりにはならぬぞ、	Mais as espees l'estuvrat esleger. » AOL.
95	コルサリス	コルサブリス	Uns reis i est, si ad num Corsablix,
194	ジュルファアレ様	ジュルファアン様	Nus n'avum mie de Jurfaleu le Blunt ;
233	エウジェエ、	ウウジェエ、	Et la siste est d'Ormaleus e d'Eugiez,
234	アストリモアス	アストリモニア	Et la sedme est de Leus e d'Astrimontes,
278	追つて論人 {ろんにん} はその方等に下げ渡すであらう	ビナベルはその方らにしかと下げ渡したぞ	Ço dist li reis : « E jo vos recrerai. »

表3 河出書房版における「…」と「[]」（「{}」はルビを示す）  
 （この表に記載されていないくても、ベディエ校訂で「…」などが現れることはある）

LESS	アルス版	河出書房版	ベディエ校訂 (1931年, 第92版) おおよその対応箇所
49	見参 {げんざん} の印としてこれを御受納あつて、ロオランとやらを	……ロオラン侯とやらを	« Tenez mun helme, unches meillor ne vi..., Si nos aidez de Rollant li marchis,
55	鎧に身をかため、兜を戴き、	鎧に身をかため、……怒りなく、兜を戴き、	Halbercs vestuz et très bien . . . . Healmes lacez e ceintes lur espees,
58	起き出た軍兵 {ぐんびよう} に護られて、大王は	軍兵 {ぐんびよう} の間に、……大王は	Par mi cel host . . . . . Li empereres mult fierement chevalchet.
71	武士の旋に従つて、金輪際単法の振舞を見せまいと、一方の旗頭として名乗を上げた。	武士の旋に従つて名乗りを上げ、金輪際単法の振舞いを見せまいと、……	Cil ad parlet a lei de bon vassal : Pur tut l'or Deu ne volt estre cuard.... . . . . .
80	オリザエは丘の頂に登つて、	オリザエは丘の頂に……	Olivier est desur un pui . . . . .
108	ボレルの子エスプリエリスといふ者は、ボルドオのアンジェリエに討たれ、	(ボレルの子エスプリエリスという者は、ボルドオのアンジェリエに討たれ、 ……承らぬ身	Esp.... icil fut filz... Burdel... . . . . . Par mi le corps . . . . .
152	承らへる身	……承らぬ身	Par mi le corps . . . . . Sempres murrai, mais cher me suis vendut. »
205	両の御腕にこれを抱かせられたが、	両の御腕に（これを抱かせられたが）、	Entre ses mains ansdous...
213	運ばせよ	運ばせよ……	« En .III. carettes les guiez... »
228	これをプレシユウズと呼び、	(これをプレシユウズと呼び、)	Par la Carlan dunt il oit parler . . . . .
242	神はシャルル王に御加勢あるぞ、	これこそ……者共を討つシャルル王の義戦だ、	Carles ad dreit vers la gent...
244	時ならぬ紅 {くれなゐ} にもみぢしてしまつた、	……	La veïsez la tere si junchee !





## Vocabulary inventions in Ban Takeo's translations of *The Song of Roland*

KUROIWA Taku

This paper aims to show how Ban Takeo, the first translator of *The Song of Roland* into Japanese, created new vocabulary and used existing Japanese words to describe the French Middle Ages in his translation. We also analyze to what extent these vocabulary coinages and innovations made by Ban were reused by the translators Sato Teruo and Arinaga Hiroto.

Ban Takeo was born in an elite cultured family in Japan and was well-versed in French, Latin, and Ancient Greek. His translation of *The Song of Roland*, published in 1941, was meticulous. He coined new words to represent the equipment used by medieval European warriors, mobilizing his knowledge of traditional Japanese culture and European classics. For example, 礼鎧, 鎖鎧, 鎖頭巾, 臍, 襖, 臣将 are his coinages or demonstrate new use of existing Japanese words. Based on Joseph Bédier's critical edition published in 1931, this translation was integrated into a collection of world literature in 1952. The second version of Ban's translation contained many modifications compared to the wartime version, reflecting the text in the Oxford manuscript more loyally and using fewer kanji characters. Finally, Sato Teruo and Arinaga Hiroto, both experts of Medieval French literature, more or less adapted some of Ban's vocabulary inventions in their translations of *The Song of Roland*, published in the 1960s, such as 鎖鎧 or 臣将.

In summary, Ban's translation and vocabulary innovations are based on his formidable mastery of Japanese and Occidental cultures. His translation of *The Song of Roland* can be considered a synthesis of multiple cultural traditions.